

中学生による音楽鑑賞文の記述内容に関する基礎的研究（1）
—音楽経験の有無が言語化にもたらす影響を中心に—

高橋 千絵

Basic Research on Contents of Music Appreciation Writing by Junior High School Students (1)
— Focusing on the effects of the existence or lack of musical experience on verbalization —

Chie Takahashi

In the junior high school government curriculum guidelines that were revised in April 2012, the enhancement of language activities is the first thing mentioned as an important item that should be improved. Language activities are also incorporated into the area of appreciation in music courses, and activities such as “describing in words” and “criticizing with a basis” are stipulated. Importance is now being attached to proactive learning content in which students express the feelings and thoughts they have during music appreciation in words, and more and more emphasis is being placed on the need to express music appreciation in writing in appreciation classes.

In this paper, we examine the kinds of differences that can be seen in words describing music depending on the existence or lack of musical experience, without being tied to parts of speech such as adjectives and attributive verbs, by using KH-Coder software to analyze the contents of questionnaire surveys on musical experience and music appreciation writings by junior high school students, and also shed light on the impact of verbalization on music appreciation education by clarifying how the words students use to describe music in their music appreciation writings change after they receive instruction from their teachers regarding appreciation.

キーワード

言語化 Verbalization, 音楽鑑賞指導 Teaching about music appreciation,
音楽鑑賞文 Contents of music appreciation writing, 音楽経験 Musical experience,
所属

広島文化学園大学大学院 Graduate School of Hiroshima Bunka Gakuen University
教育学研究科 Graduate School of Education 子ども学専攻 Course of Child Education

1. はじめに

音楽を聴いて、どのように感じたか、その音楽がどのように素晴らしいかなど、音楽を語るためには「音楽を語るための言葉」の習得が必要であり、音楽に関する知識や経験がある程度必要であると考えられる。例えば、音に対する表現として、「優しい音」「柔らかい音」「温かい音」など、形容詞を使用する場面が多くみられるが、気温や温度を表す「温かい」という言葉や、感触を表す「柔らかい」という言葉などを音に対して使用するには、この音は「柔らかい音」この音は「固い音」という知識や、聞き比べなどの経験がなければ、言葉として表現す

ることは難しいと考えられる。さらに、音楽を語る言葉は、形容詞での表現だけにとどまらない。「きれい」「びっくり」などの名詞や、「～のような」「～みたい」といった比喩表現など、音楽を語るための言葉は多種多様である。

さて、学校教育現場での音楽鑑賞教育においても、鑑賞した音楽を言葉で表現する活動の重要性について謳われている。2012年（平成24年）4月に現行学習指導要領「生きる力」となった中学校学習指導要領の改訂にあたって、充実すべき重要事項の第1として言語活動の充実が挙げられた。音楽科の鑑賞領域においても言葉の活動を取り入れ「言葉で説明する」「根拠をもって批評する」などの活動が明文化され、音楽鑑

賞で感じ取ったことや、考えたことなどを言葉で表現する主体的な学習内容が重視されるようになり、鑑賞授業における鑑賞文の必要性はますます重要視されるようになってきている。

さらに、2017年（平成29年）6月に示された新・中学校学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いでは、「音楽によって喚起された自己のイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽に対する評価などを伝え合い共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること。」

「第1学年では言葉で説明したり、第1学年及び第3学年では批評したりする活動を取り入れ、曲や演奏に対する評価やその根拠を明らかにできるように指導を工夫すること。」¹⁾と記されており、音楽を聴いて言語化するという活動の重要度がさらに高くなっているといえるだろう。

音楽鑑賞指導における言語活動には、「音色」「リズム」「速度」「旋律」などの音楽を形づくる要素を聴き取る音楽の鑑賞能力や音楽的知識が必要となる。この鑑賞の能力や音楽的知識を生徒の音楽経験の有無により分け、楽曲をどのように感受し言語表現につなげているのかを形容詞による語彙の抽出によって分析したのが光田ほか（2012）である。同論文で三村は批評能力や鑑賞能力を客観的にみるためには、まず音楽を感受する能力を図ることが必要であると、その測定を「明るい」「暗い」「やわらかい」「かたい」「静かな」「うるさい」「軽快な」「重々しい」「生き生きとした」「落ち着いた」「はげしい」「おだやかな」「楽しい」「悲しい」「派手な」「地味な」の14の評価語を用いた5段階の単極評価法で調査している。被験者は中学1年生120名で、調査対象となった被験者を音楽経験あり群と音楽経験なし群に分け、印象評価結果を分析した結果、「音楽経験あり群のほうが音楽経験なし群よりも、比較的明確に印象を評価する傾向にある」²⁾と述べている。

さらに、自由記述の内容について「①形容詞や形容動詞を中心に記述しているもの、②イメージした具代表的な情景を記述しているもの、③音楽の状況（流れや構造）を記述しているもの、④音楽的語彙を用いて音楽の諸要素を記述しているもの、⑤その他、⑥無記入、の6つに整理し」³⁾、音楽経験あり群と音楽経験なし群での比較調査をおこなっている。同論文の中で伊藤は、「音楽的語彙を用いながら音楽の諸要

素について記述している割合は両群に大きな差はみられなかった」⁴⁾が、音楽経験あり群は「具体的な情景描写をする割合が高かった」⁵⁾、音楽経験なし群では「簡単な形容詞等を単独で用いて記述する割合が高かった」⁶⁾とし、さらに音楽経験なし群の方が、無記入の割合が高かったことも示している。

音楽鑑賞文を分析するにあたって、「明るい」「きれい」「楽しい」などの形容詞や形容動詞を抽出して分析する方法は、音楽鑑賞における言語活動の研究において度々使用される手法であり、実際、生徒の鑑賞文には「きれい」「楽しい」「面白い」などの形容詞や形容動詞を使った記述が多くみられることも事実である。しかしながら、音楽を感受し、それを「きれい」と判断したり「楽しい」と判断したりするのは個人の音楽嗜好などによっても左右される可能性もある。例えば、同じ楽曲を鑑賞しても比較対象が何かによって「派手」と感じるか「地味」と感じるかは異なるであろうし、「楽しい」「快活な」「生き生きとした」の区別は個々の感じ方によるものであり千差万別である。したがってその言葉がどのような文脈において使われた語なのか、脈絡をもって使われた語なのか、という視点での分析や、音楽の鑑賞授業での学びが鑑賞文にどのような影響を与えているのか、といった視点での分析も必要であると考えられる。

そこで、本研究では、これまでの先行研究を踏まえながら、中学生を対象とした音楽の経験に関するアンケート調査と、音楽鑑賞文の記述内容分析をKH Coder⁷⁾を使用して、以下の目的で研究をおこなう。①音楽の経験の有無により、音楽を語る言葉にどのような差異が見られるのかを特定の品詞にとらわれない形で抽出し、その言葉がどのような文脈において使われた語彙かについて注目し調査するとともに、②教師の鑑賞指導が介入することにより、生徒の音楽鑑賞文で使用される音楽を語る言葉がどのように変化するのかを明らかにすることで、音楽鑑賞指導がもたらす言語化への影響について解明する。

KH Coderを用いた計量テキスト分析は、使用された語彙の抽出や、語と語の結びつきをデータ化することにより、品詞分けによって分析から漏れてしまう語彙や、生徒の語彙力や文章力に囚われることなく、鑑賞文の中で使用される＜音楽を語るための語彙＞が文章の中でどのように使われているのかを客観的に抽出し分析できるという利点を生かし調査することが

できるのが長所であると考えられる。

2. 音楽鑑賞に関わる調査

本研究では、まず被験者の音楽嗜好、音楽経験の有無、被験者を取り巻く音楽環境をアンケートにより調査し、中学生の音楽環境についての実態を明らかにする。次いで、音楽鑑賞時の言葉による説明の有無が、音楽嗜好や音楽経験の有無、生徒を取り巻く音楽環境によって、どのように変化するかについての分析もおこなう。なお、今回のアンケート調査は、広島文化学園大学教育学研究科の研究倫理委員会に「研究倫理審査申請書」を提出し、認可されたものである。(第280002号)

調査は、広島市立M中学校において、通常の音楽科の授業時間を利用し、鑑賞の授業時に実施した。調査は、質問数23の自記式質問紙によるアンケートと、音楽鑑賞後に記入する鑑賞文の記述調査を無記名方式で実施した。

アンケートは、性別、音楽経験に関する質問4項目、音楽嗜好に関する質問6項目、家庭での音楽環境に関する質問8項目で実施した。鑑賞文の記述については自由記述とし、文字制限なしによる調査をおこなった。なお、通常の音楽科授業時間内での調査と言うこともあり、アンケート調査の実施時には、筆者は立ち会わず、M中学校の音楽教諭に一任した。

調査にあたってはM中学校の第1学年6クラス201名（男子100名、女子101名）を対象として、2016年5月下旬から7月中旬にかけて実施した。

鑑賞曲は、M中学校の音楽教諭と相談の上、中学校1年生の1学期に学習する音楽鑑賞教材の中から、A. ヴィヴァルディ作曲「和声と創意の試み」第1集「四季」から「春」-第1楽章-を取り上げることにした。

授業で使用した音源は教育芸術社の鑑賞用CDで、クリストファー・ホグウッド指揮、エンシェント室内管弦楽団の演奏である。この作品は、バロック後期の作曲家A. ヴィヴァルディの代表的な作品の一つで、独奏バイオリン、第1、第2バイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスからなるコンチェルト・グロッソの編成で演奏される。この曲には「ソネット」と呼ばれる14行から成るヨーロッパの定型詩が付されていることで有名である。「春」の楽章に付随する「ソネット」の日本語訳は次のとおりである。

春がやってきた。
小鳥は楽しい歌で、春を歓迎する。
泉はそよ風に誘われ、ささやき流れていく。
黒雲と稲妻が空を走り、雷鳴は春が来たことを告げる。
嵐が止むと、小鳥はまた歌い始める。

(教育芸術社『中学生の音楽1』pp.34-35より引用)

なお、鑑賞文による記述調査については<図1>のように、教師による鑑賞指導がない状態で音楽を鑑賞し、鑑賞文を記述した3クラス(A群)と、教師による鑑賞指導後に音楽を鑑賞して鑑賞文を記述した3クラス(B群)に分けて実施した。



<図1> 鑑賞文記述の流れ (筆者作成)

なお、教師による鑑賞指導には、教育芸術社の『中学生の音楽1』が教科書として使用され、「弦楽合奏の響きを感じ取る。」「独奏楽器と弦楽合奏の響き合いを聴き取る。」ことを目標に、作曲者、楽器編成、ソネット、独奏についての説明がおこなわれた。

2-1 アンケート調査による結果と分析

アンケート調査の内容は、最初に性別、次に被験者自身の音楽に関する経験や音楽嗜好に関する項目、次に被験者の家庭での音楽環境(家族)に関する項目、次に自由記述による鑑賞文の順で構成されている。なお、被験者自身の音楽に関する経験や音楽嗜好に関する項目設定については、財団法人音楽鑑賞教育振興会が2007年に全国79校の中学1年生から3年生6,203人を対象とし実施した『第2回調査 学校における鑑賞指導に関するアンケート 調査報告書』⁸⁾(以後「全国調査」と記す。)を参考にした。アンケート調査の内容は<資料1>のとおりである。

被験者の「音楽の好き嫌い」および「音楽経験」に関する質問肢は、アンケートの質問2から質問9に該当する。それらの集計結果は次の通りである。

<表1>の①は、質問6で音楽が好きかどうかを調査した項目である。201名の内188名94%

が「音楽が好き」と回答し、「音楽はあまり好きではない」と回答した被験者は6%（13人）できわめて少数であった。M中学校の音楽の嗜好率は、全国調査の結果<表2>と比較して、やや高いことが窺える。

<表1> 被験者の「音楽嗜好」および「音楽経験」に関する調査結果

全201名 男:100 女:101	音楽嗜好		音楽経験			
	①音楽が好き	②クラブ活動	③習い事			
+ 要因	188人	94%	47人	23%	75人	37%
- 要因	13人	6%	154人	77%	126人	63%

(アンケート結果より筆者が作成)

<表2> 全国調査による音楽嗜好の調査結果

	中学校	1年	%
好き	5,626	1,903	90.3
あまり好きではない	559	205	9.7
合計	6,185	2,108	

(『全国調査』 p.69より引用)

なお、音楽が「あまり好きではない」と回答した理由を質問8で記述させた結果、「音符がよく分からない」「音符が嫌い」3名、「楽譜が読めない」2名、「面白くない」2名のほか、「歌詞が覚えにくい」「歌うのが恥ずかしい」「聴くのはいいけどやるのは嫌い」「嫌な思い出しかない」「めんどくさいから」「あまり聞かない」「曲を聞いた後の感想文が書けないから」といった理由がみられ、歌うのが苦手、楽器が苦手と答えた被験者は0%だった。

全国調査の結果<表3>では、歌唱、器楽が苦手と答えている中学生が50%を超えており、大きな数値の違いとなって表れた。以上の事から、M中学校の音楽があまり好きではない生徒は、表現活動に対する苦手意識は低く、「音符が分からない」「楽譜が読めない」など、音楽の基礎知識の部分での躓きが原因で音楽嫌いになっていることが分かった。

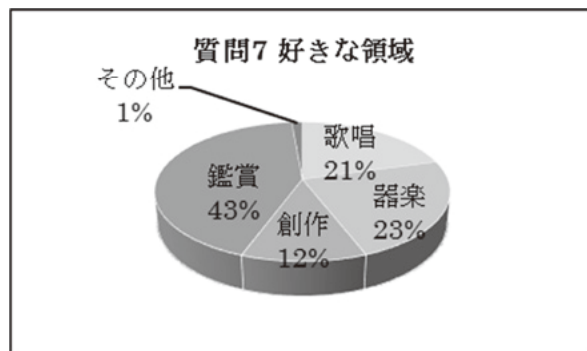
また、「音楽はあまり好きではない」と答えた13名中12名が男子生徒であるなど男女比での違いも特徴としてみられた。

<表3> 全国調査による音楽が好きではない理由

	中学校	1年	%
好き	5,626	1,903	90.3
あまり好きではない	559	205	9.7
合計	6,185	2,108	

(『全国調査』 p.69より引用)

次に、「音楽が好き」と答えた被験者に対して、質問7で音楽の活動の中でどのような活動領域が好きかを調査した結果、鑑賞が好きだと答えた生徒は43%で、他の活動に比べて高い数値を示した。次いで器楽23.5%、歌唱20.7%、創作11.6%と続いている。<図2>



<図2> 音楽の中で好きな活動領域

(アンケート結果より筆者が作成)

全国調査の結果<表4>では、鑑賞が51.3%と過半数を超える高い数値を示しており、次いで歌唱25.2%、器楽21.5%、創作1.9%の順になっている。M中学校は、鑑賞が一番高い数値を示したものの過半数を超えてはいない。また、歌唱よりも器楽が好まれ、創作においては全国調査の結果と比べて6倍近くの高い数値となった。

<表4> 全国調査による音楽の中で好きな活動領域

	中学校	1年	%
歌うこと	1,960	650	25.2
楽器を演奏すること	1,463	556	21.5
音楽を聴くこと	4,214	1,325	51.3
音楽を創ること	177	50	1.9
合計	7,814	2,581	

(『全国調査』 p.69より引用)

次に、音楽の授業で聴いた音楽の中でどのジャンルの音楽が好きかという質問9では、過半数近くの47%の生徒が、クラシックが1番好きと回答し、続くポップス19%、和楽器の音楽12%と大きく差をつけた。また、好きな順1位から3位までの合計では、クラシック80%、和楽器の音楽54%、ポップス46%という結果となり、クラシックだけではなく、和楽器の音楽も過半数を超える結果となった。

<表5> 鑑賞授業で聴いた音楽で好きなジャンル一覧

	1位	2位	3位
クラシック	47%	21%	12%
ポップス	19%	17%	10%
ジャズ	3%	6%	10%
歌謡曲	5%	8%	8%
ロック	2%	5%	8%
ゲーム音楽	5%	6%	3%
和楽器の音楽	12%	20%	22%
伝統音楽	3%	9%	14%
諸外国の音楽や民謡	2%	7%	13%
その他	2%	1%	0%

(アンケート結果より筆者が作成)

全国調査の結果<表6>では、クラシックが1番好きと回答した生徒が68.3%と過半数を超える高い数値を示したほか、1位から3位までの合計も100%になっており、M中学校の生徒は全国調査の結果と比べて、クラシックの嗜好率がやや低いが、和楽器の音楽に対する数値の高さが特徴づけられた。

<表6> 全国調査による鑑賞授業で聴いた音楽で好きなジャンル一覧

	1年		
	1位	2位	3位
クラシック	68.3	21.0	11.7
ポップス	14.3	29.0	6.7
ジャズ	1.6	3.2	15.0
歌謡曲	6.3	6.5	6.7
ロック	0.0	3.2	8.3
ゲーム音楽	3.2	4.8	10.0
和楽器の音楽	1.6	9.7	10.0
伝統音楽	0.0	4.8	6.7
日本や諸外国民謡	3.2	14.5	20.0
その他	1.6	3.2	5.0

(『全国調査』 p.69より引用)

M中学校の生徒は、小学6年生の11月に、小学校の体育館で実施された音楽鑑賞会で和太鼓、箏、尺八、神楽の演奏を鑑賞している。今回の調査が和楽器の音楽の鑑賞から約半年しか経過していないこと、さらに生の演奏を聴いた経験が、被験者らに強い印象を残し、その結果として全国調査の結果よりも「和楽器の音楽」の数値が大きく表れたのではないかと推察される。

以上の調査の結果から、M中学校の生徒は、全国調査で見た一般的な中学生の傾向と同様に、音楽が好きで、その中でも鑑賞活動が好きで、一番好きな音楽のジャンルはクラシックであるという音楽嗜好の傾向が把握できた。

次に、このM中学校の生徒が、音楽鑑賞文にどのような記述をしたのか、内容の分析をおこなう。

3 「音楽経験」と言語化の相関性

本項では、音楽鑑賞における言語化に被験者の授業外での「音楽経験」が、どのような影響を与えているのかを明らかにするために、教師による鑑賞指導なしのまま音楽鑑賞をし、鑑賞文を記述したもの(A群)について、被験者の音楽経験の有無によって、言語化にどのような差があるのかをKH Coderの抽出語・共起ネットワーク比較により明らかにする。

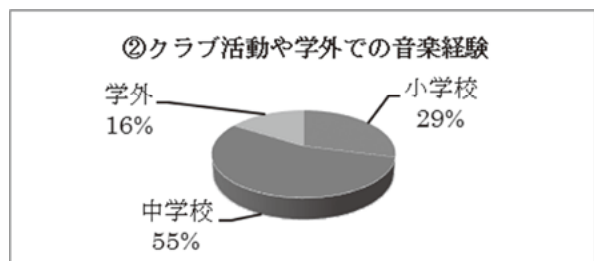
共起とは、文の中でどの語とどの語と一緒に使われたのかという語と語のつながりを示す。さらに、音楽経験ありをプラス要因、音楽経験なしをマイナス要因とし、それぞれを比較するために、各鑑賞文から特徴づけられる語を抽出し、抽出された語の共起関係の結びつきを比較したものがネットワーク図である。

ここでの「音楽経験」は、音楽の授業外での活動とし、「クラブ活動や学外での音楽経験」と「習い事」の2つに分け、それぞれ「経験あり」をプラス要因、「経験なし」をマイナス要因として比較する。

3-1 クラブ活動や学外での音楽経験と言語化

中学校でのクラブ経験を質問2、小学校での音楽系クラブ経験を質問3、学校以外での音楽系のクラブや団体の所属経験を質問5で調査した結果、学校でのクラブ活動や学外での合唱団

などの音楽活動への参加に関しては被験者の23%が経験ありと回答しており、約5人に1人が経験者ということになる。また、そのうちの29%が小学校でのクラブ活動と回答したのに対し、中学校では55%と増加傾向にあった。一方、学外での音楽系のクラブや団体に所属した被験者も16%存在する。〈図3〉



〈図3〉クラブ活動や学外での音楽経験の実態調査
(アンケート結果より筆者が作成)

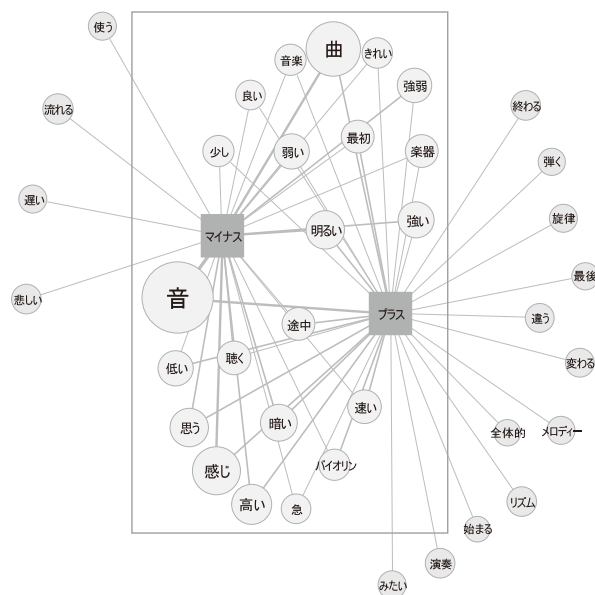
中学校でのクラブ経験者の内容は、吹奏楽部が18名、ギター・マンドリン部が16名である。また、小学校でのクラブ活動は、音楽クラブ15名、箏1名、ダンス2名であった。さらに学外の活動としては合唱団4名のほか、ジュニアオーケストラ、音楽隊、和太鼓などの活動が若干名みられた。

この小学校や中学校で音楽系のクラブに所属したことがある被験者、および学外での音楽団体(合唱団やジュニアオーケストラ)などでの音楽活動経験がある被験者(以後「A①プラス」と記す。)と、音楽活動経験がないと回答した被験者(以後「A①マイナス」と記す。)の鑑賞文に記述された語彙の比較をおこなうために、KH Coderの抽出語・共起ネットワーク比較のネットワーク図を作成した。

ネットワーク図を作成するにあたり、まず分析の前処理として、鑑賞文に記入された漢字の誤りなどを修正後、データのクリーニング(同義語の書き換え、未知語の置き換えなど)をおこなった。同義語の置き換えは「聴く」と「聞く」、「強い」と「大きい」、「弱い」と「小さい」を統一。また未知語として分類された「リコーダー」「ビブラート」などの音楽用語を名詞として置き換えた。次に、鑑賞文で使用された7,905語を抽出し出現回数順に並べ、その中から出現回数が5回以上となる83語を取捨選択した。そして、「A①プラス」「A①マイナス」それぞれに特徴的に出現する語を導くために、KH Coder分析により特徴語を抽出した。出現

確率が全体での出現確率よりも小さくなるような語は、特徴的な語とは判断されない。その中から共起関係の強い語を抽出し、「A①プラス」「A①マイナス」を比較したものが〈図4〉のネットワーク図である。

〈図4〉の中心に位置する四角で囲まれた「曲」「音楽」「きれい」を含む語群は、「A①プラス」と、「A①マイナス」に共通して共起のある語として検出された語である。また、「音」「曲」など鑑賞文への出現回数の多い語ほど大きい円で描写され、強い共起関係ほど太い線で描写されている。



〈図4〉抽出語・共起ネットワーク比較(クラブ部活や学外での音楽経験の有無)
(KH Coder分析による特徴語比較結果より作成)

左側に位置する「使う」「流れる」「遅い」「悲しい」という4語は「A①マイナス」、右側に位置する「終わる」「弾く」「旋律」を含む12語は「A①プラス」に共起の強い語として特徴づけられた語を示している。

共通して共起のある語として検出された語は22語と多く、「A①プラス」の音楽を語るための語彙12語に比べ「A①マイナス」は4語と語彙が少ないことが分かる。

さらに特徴語の内容を比較すると、演奏楽器に関する記述として「A①マイナス」では、「弦楽器がよく使われている。」「たくさん楽器を使っている感じ。」「バイオリンなどが使われている。」など「使う」という語が抽出されたのに対して、「A①プラス」では、「バイオリンを軽く弾いているような感じがした。」「バイオリンが主旋律を弾いている。」などの「弾く」

また、音楽に関する習い事をした経験がある被験者よりも、クラブ活動や学外での音楽活動の経験をした被験者の方が、音楽を語るための語彙を多く使用して鑑賞文を書いていることが明らかとなった。音楽の習い事は一対一で実施されることが多く、逆にクラブ活動は複数での活動が多い。M中学校においても吹奏楽部やギター・マンドリン部、合唱団といった団体での活動が多くみられる。複数名で活動をおこなうためには、音楽だけではなく、言葉を介したコミュニケーションも重要となってくる。指導者による演奏指導だけではなく、同じ楽器同士のパート練習や他楽器とのセクション練習など、音楽を語る場面が「習い事」よりも多くなるのは必然的であろう。

これらのことから、音楽を語るための語彙の習得には、授業外での音楽経験が有効であるとともに、より多くの音楽を語る場面が求められる事が明らかとなった。

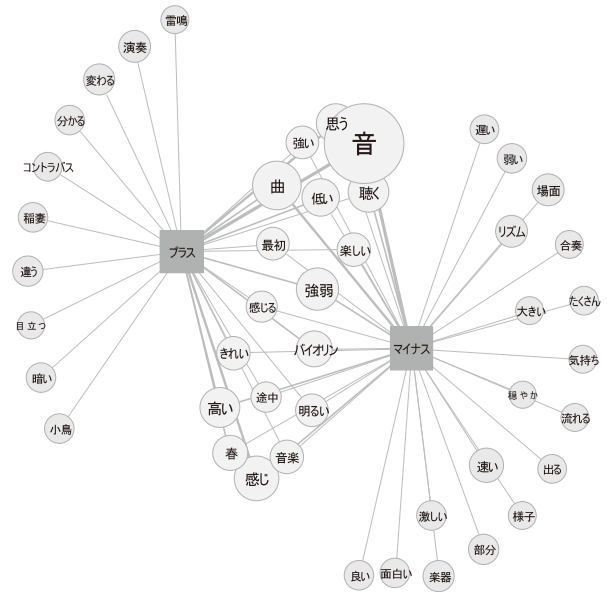
4 教師の介入による言語化の変化

これまで、被験者の音楽経験の有無による言語化の差異を見てきたが、次に教師による鑑賞指導が言語化へどのような変化が見られたかを明らかにするため、音楽を鑑賞して鑑賞文を記述した3クラス（B群）の鑑賞文をKH Coderにより分析する。

4-1 クラブ活動や学外での音楽経験と言語化

まず、クラブ活動等の経験の有無による鑑賞文が、教師による鑑賞指導後にどのような変化が見られたかを分析する。

クラブ活動等の経験があると回答した被験者（以後「B①プラス」と記す。）と、経験がないと回答した被験者（以後「B①マイナス」と記す。）の鑑賞文に記述された語彙を、前述の手順同様にそれぞれ抽出し、出現数による語の取捨選択を最小出現数5回以上に設定し、その中から共起関係の強い語を抽出し作成したのが<図7>である。



<図7> 抽出語・共起ネットワーク比較（クラブ部活や学外での音楽経験の有無）

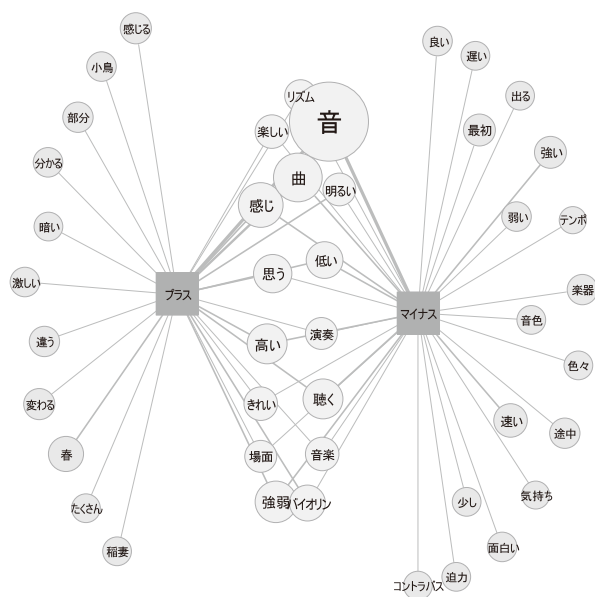
「B①プラス」よりも「B①マイナス」の方が、倍近くのと音楽を語るための語彙>を使って鑑賞文を書いていることがわかる。また、記述内容として「B①プラス」ではソネットから「小鳥」「稲妻」「雷鳴」という語が抽出され、「B①マイナス」では「合奏」「楽器」など教師による鑑賞指導により導き出された語彙が抽出された。

教師による鑑賞指導がない状態で音楽を鑑賞し、鑑賞文を記述したA群の分析結果<図4>と比較すると「B①プラス」の語が若干減少したのに対して、「B①マイナス」の語が4語から18語と5倍近く増加した。特に「A①マイナス」に抽出された4語が形容詞と動詞のみだったのに対して、「B①マイナス」では、形容詞、動詞だけではなく形容動詞の「穏やか」のほか、名詞の「場面」「リズム」「合奏」「楽器」「部分」などの語が急増しており、教師による説明により、さまざまな品詞を使って音楽を語るための語彙を増やしていることが窺えた。

4-2 習い事による音楽経験と言語化

次に、ピアノなどの音楽の習い事を経験したことのある被験者（以後「B②プラス」と記す。）と、音楽の習い事を経験したことのない被験者（以後「B②マイナス」と記す。）の鑑賞文が、教師による鑑賞指導後にどのような変化が見られたかを分析する。

次の<図8>は、前述と同様の手順に従い作成した。



＜図8＞抽出語・共起ネットワーク比較（音楽の習い事の有無）

＜図7＞同様に、「B②プラス」よりも「B②マイナス」の方が、多くの＜音楽を語るための語彙＞を使って鑑賞文を書いている様子が伺える。

A群の分析結果＜図6＞と比較すると、「A②マイナス」の語が5語だったのに対して、「B②マイナス」の語が17語に増加したほか、共通して共起のある語として検出された語群が、A群では23語だったのに対して、B群では16語に減少しており、音楽の習い事の有無により、抽出される特徴語がはっきりと分かれる結果になった。

記述内容では「A②マイナス」にみられた「みたい」というあいまいな言葉を示す語が消滅しているほか、「B②マイナス」には「コントラバス」という具体的な楽器名の記述や「面白い」「良い」といった楽曲の良さに関する記述が表れており、教師の鑑賞指導により、気づきが明確になり、楽曲の良さに触れる記述が増加していることが分かる。また、「B②プラス」ではソネットや場面の変化に注目した記述が多くみられた。

これらの結果から、授業外での音楽経験がある被験者の鑑賞文は、＜音楽を語るための語彙＞の数に大きな変化は見られなかったものの、教師による鑑賞指導により、ソネットで学習した「小鳥」「稲妻」「雷鳴」という名詞が多く出現し、学習に基づいた具体的な語彙の記述が増えることが分かった。

記述内容に大きな差が出たのは音楽経験のない被験者の鑑賞文である。教師による鑑賞指導により、共起のある語彙が指導前の2倍から3倍に急増し、＜音楽を語るための語彙＞を使った脈絡のある文章へと変化したことが分かった。また、記述内容も「長い」「悲しい」といった記述から「面白い」「良い」という前向きな記述内容に変化したほか、あいまい語を示す「みたいな」の記述がなくなり、「コントラバス」「チェンバロ」などの具体的な楽器名の記述に変化し、音楽鑑賞指導の学習効果が垣間見られる結果となった。

5. 考察

今回の調査では、KH Coderを用いた計量テキスト分析により、授業外での音楽の経験の有無が、音楽を語る言葉にどのような差異となって表れるのかを、特定の品詞にとらわれない形でデータ化し、語と語の結びつきに注目し分析することで、音楽経験の有無が言語化にもたらす影響を明らかにし、さらに教師の鑑賞指導の有無により、生徒の音楽鑑賞文で使用される音楽を語る言葉がどのように変化するかをみるのが目的であった。

まず、授業外での音楽経験がある被験者は＜音楽を語るための語彙＞を多く持っており、音楽経験のない被験者に比べて2倍から3倍の語彙を使って鑑賞文を書いていることが分かった。また、言語化に優位に働く音楽経験は「学校でのクラブ活動や学外での音楽活動」であることが明らかとなった。一対一で実施されることの多い「習い事」よりも、複数名でさまざまなコミュニケーションを図りながら実施されるクラブ活動などの音楽活動の方が、音楽を語る場面が多いことが想定される。音楽を語るための語彙の習得には、授業外での音楽経験の有無だけでなく、音楽を語る場面がどれだけ与えられるかが、影響することもわかった。

さらに、音楽経験の有無に関係なく共通して共起のある語として検出された語は、出現回数が多い「音」「曲」のほかに「明るい」「暗い」「強い」「弱い」「強弱」といった、音楽要素に直接結びつく語彙が多く抽出される結果となった。また、音楽経験のある被験者の記述として特徴づけられたのは、演奏者に対する関心の高さが窺える演奏者側の視点に立った「演奏」「弾く」といった語彙である。音楽経験のない被験者は

「使う」という語彙を使っており、両者の楽器演奏に対する視点の違いが明らかになった。

次に、教師の鑑賞指導が介入することで、生徒の音楽鑑賞文で使用される音楽を語る言葉がどのように変化したのかを分析した結果、音楽経験のある被験者の〈音楽を語るための語彙〉は、語彙自体の増加にはあまり影響は見られなかったものの、鑑賞指導後には内容が精査され、ソネットに基づいた「小鳥」「雷鳴」などの記述や、学習した内容について「分かる」という記述がみられるなど、鑑賞指導により場面を想像しながら鑑賞したり、学習内容を確認したりしながら鑑賞している様子が分かった。また、授業外での音楽経験がない被験者は、鑑賞指導後に〈音楽を語るための語彙〉が4倍近くに増えることが明らかになった。記述内容も、鑑賞指導後には「音色」「コントラバス」「楽器」という楽器の音色に注目した具体的な記述や、楽曲に対する前向きな気持ちを表す「面白い」「良い」といった語が表れており、鑑賞指導により聴くポイントが絞られ、楽曲の良さに気づきを持った鑑賞文へと変化することが分かった。また、音楽経験の有無に関係なく鑑賞文に使用され、共通して共起のある語として検出される語が、鑑賞指導後には少なくなり、主にマイナス要因の特徴語として出現することが特徴付けられた。特筆すべきは、鑑賞指導後は、音楽経験の有無に関係なく、共通して共起ある語として「楽しい」が出現したことであろう。

音楽の習い事も、音楽系クラブ活動でも、レッスンや合奏指導の際には模範演奏などの実演で指導をおこなうだけではなく、楽譜を見ながら「この部分はフォルテだからもっと強く弾きなさい。」「この部分はフルートの音色を聴いてハーモニーを合わすように。」など、指導者による〈音楽を語るための語彙〉を聴きながら指導を受ける場面が必然的に多くなる。その〈音楽を語るための語彙〉と実際の演奏経験が結びつくことで、語と語の結びつきがより強くなり、それが「内なる図書館」⁹⁾の形成につながっているのではないかと推察する。

このように音楽を語るための語彙の習得には、楽器の演奏経験が優位に働くことがわかったが、幼少の時からピアノを習っている生徒も居れば、音楽の習い事はしていないが、中学校で吹奏楽部に入部した生徒も居ると考えられる。今回の調査では、音楽の経験年数や経験時

期、また楽器別による分析はおこなっていない。今後は、授業外での音楽経験年数や期間、経験した楽器の種類によって言語化にどのような差異が出るのかにも注目していきたい。

さらに、教師による鑑賞指導後の鑑賞文では、〈音楽を語るための語彙〉が著しく増加し、脈絡のある根拠を持った言語化へとつながったことが窺えた。授業外での音楽経験がなくても、音楽鑑賞の授業において鑑賞指導を受けることで「内なる図書館」を形成し〈音楽を語るための語彙〉を育むことが十分に可能であることが分かった。また、指導によって楽曲の良さや楽しさに気づくことが出来るようになっており、音楽鑑賞指導の意義を感じることが出来る結果となった。

このように音楽における言語化には教師による指導がどのようになされるかが重要な要因となる。高須(2005)は鑑賞教育の難しさについて「①音楽にかかわるどのような資質や能力を鑑賞活動を通して育めばよいのか分からない。②鑑賞教材の「よさや美しさ」のポイントがつかめない③ポイントを教える難しさ」¹⁰⁾と指摘しているように、鑑賞教育にはまだまだ多くの問題点を抱えているのも実情である。

今後は、教師による指導がどのように言語化に影響をもたらすのか、教師による指導言や授業観察により、より細かな分析が必要であると考えられる。指導方法の差によって、どのような言語化に違いが表れるのかを分析することにより、鑑賞授業においてより豊かな言語活動ができる教授法についても探していきたい。

注

- 1) 文部科学省 HP「中学校学習指導要領」(平成29年3月公示) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf (2017年8月閲覧)
- 2) 光田龍太郎ほか「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究(2)-音楽を感受する能力測定方法の検討-」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第40号, 2012, p.169.
- 3) 光田龍太郎ほか, 前掲書, 2012, p.169.
- 4) 光田龍太郎ほか, 前掲書, 2012, p.169.
- 5) 光田龍太郎ほか, 前掲書, 2012, p.169.

- 6) 光田龍太郎ほか, 前掲書, 2012, p.169.
- 7) 樋口耕一氏や川端亮氏らが2001年に公表したもので, 自らのイニシャルから「KH Coder」と命名されたフリーソフトウェア。社会調査における自由記述, インタビュー記録, 新聞記事などのテキスト型データの内容を分析するという意図で開発され, 研究事例は2013年9月には論文と学会発表を合わせて500点を数えており, 処理内容がすべて明らかにされていることから, 妥当性と信頼性を獲得しつつある分析手法の1つである。テキスト型データであれば, 広く人文・社会系の研究分野および実務に活用できるとされている。
- 8) 財団法人 音楽鑑賞教育振興会『第2回調査学校における鑑賞指導に関するアンケート 調査報告書』2007, pp.32-33.
- 9) 岡田暁生『音楽の聴き方-聴く型と趣味を語る言葉-』中央公論新社, 2009, p.13.
- 10) 高須一「子どもにとって学びがいのある音楽科授業を創造する(11) —音楽科の学力をめぐる—」『音楽鑑賞教育』音楽鑑賞振興財団, 2005, pp.6-9.
- 7) 三村真弓ほか「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(3) - 中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目して -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号, 2010, pp.167-172.
- 9) 三村真弓ほか「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究(1) - 聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第39号, 2011, pp.153-158.
- 10) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』第2刷, 教育芸術社, 2009.
- 11) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』第6版, ぎょうせい, 2013.
- 12) 文部科学省『中学校学習指導要領』5刷, 東山書房, 2003.
- 13) 山本文茂『戦後音楽鑑賞教育の流れ—財団誌「音楽鑑賞教育」は何をしたか』音楽鑑賞教育振興会, 2010.
- 14) 吉富功修ほか「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1) - 中学校入学時の音楽学力の実態を中心として -」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号, 2008, pp.155-163.
- 15) 渡辺裕『聴衆の誕生—ポスト・モダン時代の音楽文化—』中央公論新社, 2012.

主な参考文献

- 1) 小原光一ほか『中学生の音楽1』教育芸術社, 2012, pp.34-37.
- 2) 高木夏奈子「<音楽鑑賞文>にみる児童の<音楽の語りかた>の分析」『植草学園大学研究紀要』第6巻, 2014, pp.15-25.
- 3) 西島千尋『クラシック音楽は, なぜ<鑑賞>されるのか 近代日本と西洋芸術の受容』新曜社, 2010.
- 4) 宮下俊也「音楽鑑賞学習における批評の構造と思考過程の検討」『日本学校音楽教育実践学会紀要』14, 2010, pp.251-262.
- 5) 宮下俊也, 岩田真理「音楽鑑賞教育における批評の教育的意義とそのアセスメント - 高等学校芸術科音楽の授業実践と発話の解釈を通して -」『日本学校音楽教育実践学会紀要』11, pp.180-190.
- 6) 三村真弓「言語力の育成をめざしたこれからの教科教育 - 音楽科授業における言語力とは何か -」『日本教科教育学会誌』第31巻, 第4号, 2009, pp.43-46.

<資料1> アンケート調査内容

下の質問に当てはまる事項に○印, または()に内容を書いてください。

1. あなたの性別は ①男子 ②女子
2. 中学校でのクラブ活動は()部
3. 小学校などで音楽系クラブに所属したことがありますか?
①ある(具体的に:) ②ない
4. これまでに習い事で音楽(ピアノ, 歌など)を習ったことがありますか?
①ある(具体的に:) ②ない
5. 学校以外で音楽系のクラブや団体(合唱団やジュニアオーケストラなど)に所属したことがありますか?
①ある(具体的に:) ②ない

※次の6~8は音楽の授業に限定しないでください。

6. 音楽は好きですか? ①好き⇒7へ ②あまり好きではない⇒8へ
7. 問6で「好き」と答えた方にお聞きします。音楽で好きなことは何ですか?
あてはまるものすべてに○をしてください。

①歌うこと ②楽器を演奏する事 ③音楽を聴くこと ④音楽を創る事 ⑤その他()

8. 問6で「あまり好きではない」と答えた方にお聞きします。理由は何ですか?
9. 小学校~中学校の音楽の授業で聴いた音楽の中では, どの音楽が好きですか?
1位~3位に当てはまるものを①~⑩でお答えください。1位(), 2位(), 3位()

①クラシック ②ポップス ③ジャズ ④歌謡曲 ⑤ロック ⑥ゲーム音楽
⑦和楽器の音楽(箏, 尺八, 太鼓など楽器の音楽) ⑧日本の伝統音楽(歌舞伎, 能・狂言, 雅楽など)
⑨日本や諸外国の音楽や民謡 ⑩その他()

10. 小学校~中学校の音楽の鑑賞の授業で聴いた音楽の中で印象に残っている音楽・曲は何ですか?
11. 問10の音楽・曲が印象に残った理由をお聞かせください。
12. 家族の中で音楽が好きな人はいますか?
①はい(A.父母 B.兄弟姉妹 C.祖父母 D.その他) ②いいえ
13. 問12で「はい」と答えた方にお聞きします。

家族はどのような音楽を好んで聴いていますか?あてはまるものすべてに○をしてください。

①クラシック ②ポップス ③ジャズ ④歌謡曲 ⑤ロック ⑥ゲーム音楽
⑦和楽器の音楽(箏, 尺八, 太鼓など楽器の音楽) ⑧日本の伝統音楽(歌舞伎, 能・狂言, 雅楽など)
⑨日本や諸外国の音楽や民謡 ⑩その他()

14. 家族の中で何か音楽(楽器)をやっている人はいますか?
①はい(A.父母 B.兄弟姉妹 C.祖父母 D.その他) ②いいえ
15. 問14で「はい」と答えた方にお聞きします。どのような音楽(楽器)をやっていますか?
16. 家で音楽についてのお話をすることがありますか? ①はい ②いいえ
17. 問16で「はい」と答えた方にお聞きします。どのような会話をしますか。
あてはまるものすべてに○をしてください。

①アーティストについて ②楽曲・歌詞について ③楽器について ④コンサートについて
⑤クラブや習い事について ⑥音楽の授業について ⑦その他()

18. 演奏会などに行く機会はありますか ①はい ②いいえ
19. 問18で「はい」と答えた方にお聞きします。

どのような演奏会に行ったことがありますか?あてはまるものすべてに○をしてください。

①クラシック ②ポップス ③ジャズ ④歌謡曲 ⑤ロック ⑥ゲーム音楽
⑦和楽器の音楽(箏, 尺八, 太鼓など楽器の音楽) ⑧日本の伝統音楽(歌舞伎, 能・狂言, 雅楽など)
⑨日本や諸外国の音楽や民謡 ⑩その他()

ここからは, 今から聴く(聴いた)音楽について感じたこと等を記入して下さい。

20. 音楽を聴いて気がついたことや感じたことをできるだけたくさん書いてみましょう。
21. 演奏している楽器の名前も分かったら書いてみましょう。
22. もしこの曲をあなたが誰かにお勧めするとしたら, お勧めポイントは何だと思えますか?
23. この曲を聴いたことが無い人に「こんな曲だよ」と伝えるための紹介文を書いてみましょう